

名誉顧問のお言葉

稽古と継承とは何なのかを考える

現役の諸君にとって、稽古とは「自己鍛錬」だろうか。教育学では「自己実現」といった表現も用いられる。だが、そこで言う「自己」とは誰なのか。そして「鍛錬」によって何を「実現」しようとしているのだろうか。10代末から20代前半の諸君には、なお人生に無限の時間が保障されているように見える。だが、だからこそ冒頭の問いを手向けたい。

合気道の稽古では、その名のとおり曾ての先人から伝えられた技、その型を習う。稽古の「稽」という字は、考えることを意味するが、もともとは植物の成長がなんらかの原因で阻害され、発展が留められ、その芽が傾くことを言うらしい。とすると「考える」といっても、首を捻り、頭を傾け、ない知恵を絞る、という含意が読み取れる。昔の人の教えは、簡単には腑に落ちない。納得がゆかない。あるいは真似しようとしてもうまくゆかない。そこで思索し、工夫し、なんとかそれを会得しようとする。それが稽古なのだろう。

稽古をする身体は、古の人から受け継ぐべき技を蓄え、それを具現するための器である。器といっても、水も漏らさぬ容器ではなく、多孔質で、外からの教えも受け入れれば、受け入れたものをあたりに発散する通気性も持ち合わせる。また器といっても硬い受け皿ではなく、それ自身が技を繰り出すために、自在に変形できなければならない。技をとおして相手とどのように関わるか。それも、単純な勝敗に拘り、試合の結果を競うだけではなく、「手合わせ」を生きる過程として演練する。そこに、合気道の稽古の醍醐味もある。

稽古する身体とは、生きた器である。世代から世代へ、先生から師弟へと、生きた肉体を器にして、我々は教えを継いで行く。「継ぐ」と、簡単に言うけれど、そこには「稽古」という名の試行錯誤が伴わずにはいない。素直に伸びようとしてもうまくゆかない障碍を乗り越えるために、いろいろと考えを巡らせるのが、「稽古」なのだから。「鍛錬」し「実現」されるべき「自己」というものも、かつての教えを自ら消化し、血肉化したものであり、それはまた自己完結することなく、生きる限り「稽古」とともに変貌を遂げ、最終的には次の世代へとバトン・タッチされてゆくもの、として定義されていることになる。

「継ぐ」と言うが、先代から引き継ごうとしても、多くの技や知識は、時代や社会のさまざまな制約ゆえに、否応なく失われてゆく。とすれば「継ぐ」ことは、失われたものの「償い」でもある。「償い」きれないからこそ、それを承知で「継ぐ」しか、稽古にできることはない。多くの場合、我々は自分の師のそのまた師を直接に知ることは稀だろう。50年、半世紀の世代差を越えて、孫弟子が祖父世代の技を体得することは、至難の業といってもよい。「稽古」には、何が失われたのかを顧みて反省する、という意味も込められている。稽古は先人の恩恵を反芻する機会でもある。恩恵とは「慈しみ」とも書く。だが武術はまた「居つく」ことを嫌う。「慈しむ」感情は、ともすれば大切にしようとするあまり、そこに「居つく」ものだ。「居つく」こと、執着は、稽古ではむしろ推奨されない。特定の武器に頼ろうとし、得意技へと強引に状況を持ち込もうとする姿勢は、おもわぬ不覚を招くからだ。古人の求めたところを「慈しみ」つつも、そこに「居つく」ことなく、執着を捨てる覚悟に、かえって「稽古」の提要もある。「うつしみ」(現身)は生きた器だが、それはまた容易に、空蟬すなわち、死んだ「抜け殻」へと変貌する。身を捨ててこそ浮かぶ瀬も

あれ、と言うが、「捨て身」すなわち「自己放棄」もまた、「稽古」のひとつの姿をなす。してみると、自己実現の可能性とは、どこまで自己を空っぽにできるかにも懸っている。

だが、「自己を空っぽにする」と言われても、まだ実感がわからないかもしれない。25歳までの稽古は、どちらかといえば、ひたすら自分に利益となる肥しを吸収し、「自己」を拡大し、より強い、より巧みな「自己」を実現することに傾きがちだ。それはそれで構わないし、そこまでの年齢では、より先に進むためにも必要な動機づけにほかならない。だがおおよそ25歳を過ぎ、自分の肉体的な能力のピークを過ぎると、そうした「自己実現」の限界もみえるようになってくる。そしてそこから、新しい次元が開けることになる。

人生体験を積むにつれて、人は自分の「自我」を押し通せば、それで世の中が思い通りに進むものとは限らないことを、悟ってゆく。乳幼児だって、抱っこしてほしいときにもしてもらえない、という不充足の体験を糧として、社会性を身に付けてゆく。ふと気づくと、人生の行路というものも、さまざまな条件の交錯のなかで、選び取られてゆくものであることが、自ずと悟られてくる。その条件が見えずに遮二無二進むと、事故を起こす。というか、小さな衝突や事故を経験するなかで、衝突する部分を削ぎ落とし、事故を誘発する要素を脱落させることで、ゆっくりと「自己」が形成されてゆく。小さな「我」を捨てることで、よりおおきな「我」へと組み込まれていく。それが社会人となることだろう。

これを抵抗精神の麻痺とか、世間への順応による批判精神の減退だ、と決めつけるのは、おそらくお門違いだろう。突っ張って、トンがって見せるのも大いに結構だが、それを發揮するには、相応しい場と頃合いがある。時機を外すと、同じ行動でも、所期の成果は収め難い。そしてこればかりは、経験のなかで練ってゆくしかない。合気道の稽古とは、道場という保護された空間のなかで、こうした体験を疑似的に体得してゆく機会なのだろう。自分自身の力だけで局面を拓く、というのではなく、周囲の人々の協力を円滑に取り付ける。そうすると、自分の欲する行動も、あたかも周囲の環境のなかで予め準備されていたかのような性質を帯び、おのずと周囲の賛同を得て、その力添えのなかで進むようになる。それがうまくゆかない場合には、どこかに無理があり、どこかに不調和が隠れている。

上級者から「力を抜きなさい」と忠告されて、初心者はその意味が掴めず、当惑する。だがその意味もそろそろ見えてきただろう。自我を張って力づくに動いたのでは、自分を包む周囲の様子は却って見えなくなる。自分を無にし、自分の力を殺してはじめて、その場の力線の錯綜が見えてくる。見えるというより、触覚でじかに感じられるといったほうが正確だろうか。これは試しに目をつぶって稽古をしてみれば、如実に実感できるはずだ。周囲の力を素直に受けて、自在に動けるようになると、稽古は一步先に進むこととなる。

元人文学部助教授・元顧問 国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学
名誉顧問 稲賀繁美